

川崎市教育委員会賞受賞作品

「なぞの空地は何だ？川崎市の浄水場から見える未来」

向丘小学校 5年生 寺瀬 愛

私は昨年、多摩区を車で走行中に、なぞの広い空地を見つけた。

「いったいここは何なのだろう。」

不思議に思い、母に聞くと、元は生田浄水場があったということを教えてくれた。私はそこで疑問が思いうかんだ。川崎市の人口は増え続けていると学校で先生に教えてもらった。

「人口が増えているのなら、水を使う人が増え、水を浄水場でたくさん作らなければいけないのではないか。どうして浄水場がなくなってしまったのだろうか。生田浄水場がなくなってしまって大丈夫なのだろうか。」という疑問である。私は夏休みを使い、調べてみた。

まず、図書館へ行き、川崎市の浄水場についての資料を調べてみた。すると、私が生まれた十年前には、長沢・生田・しお見台の三つの浄水場があったのに、平成二十八年には水道水を作る浄水場は、長沢浄水場だけになったことがわかった。続けて、「川崎市の人口と水道使用量の移り変わり」についても調べてみた。祖父が生まれた昭和三十年には四十五万人だった人口が、父が生まれた昭和五十年には百一万人、そして令和元年には百五十三万人、令和十一年頃まで人口は増え続けるそうだ。水道使用量については、二〇〇五年ころから、人口は増えているのに、水の使用量は増えていないことがわかった。人口が増えたのに使う水の量がへったのには大きく三つの理由がある。一つ目は、人口は増えているが、水を多く使うお店や工場の数はへっていて、工場では回収水を再利用するところも増えていること。二つ目は、家電やトイレが水をあまり使わないものに進化していること。三つ目は、私たちの生活が水を大切にする生活に変わってきたこと。平成二十八年の川崎市の意識調査では、七十九%の川崎市民が節水を心がけていることがわかった。

資料を調べていく中で、「川崎市の人口は増えているが、水の使用量はへっている。だから生田浄水場がなくなって、水を作る量がへっても大丈夫なのだ。」ということがわかった。しかし、また新たな疑問が生まれた。「なぜ三つあった浄水場の中で長沢浄水場を残すことにしたのか。」ということだ。そこで、長沢浄水場を訪ねることにした。

長沢浄水場は坂をのぼった高い土地にあり、遠くに東京スカイツリーが見えた。入り口からげんじゅうな警備がされていて、みんなが口にする物に毒などが入ってしまわないようになっていた。浄水場の方が長沢浄水場を残した理由を教えてください。一つ目は、三つの施設の中で一番大きかったこと。二つ目は、三つの浄水場のうち長沢だけがダムから二つの導水ずい道があり、災害に強いこと。三つ目は、

高い場所にあり、川崎市内に自然の力で水を流せる環境にやさしい場所であること。今は、百五十万人の生活を支える、ちょうどよい水の量が作られているようだ。

このように川崎市の浄水場の形が変化しているのは偶然ではない。将来の水道使用量やしゅう理のタイミングも考えて、きちんと計画が立てられているのだ。平成十八年に「川崎市水道事業の再こうちく計画」が出され、今の形となった。さらに平成二十九年には、三十年から五十年先の将来までイメージした「川崎市上下水道ビジョン」も出されている。私は調べる中で、川崎市のみんなのことや将来のことがしっかり考えられていることを初めて知り、「川崎市は安心してくらせるまちだな。」と感じた。また、たくさんの方の努力があるからこそ、毎日あたり前に水道を使えていることがわかった。それはとてもありがたいことで、感謝の気持ちを忘れずに、水を大切に使っていきたいと感じた。

私も将来、大好きな川崎のまちで、だれかのためになる仕事をしたい。今は学校の先生になりたいと思っている。学校の先生だったら、子ども達が学校に来る事を楽しみに思ってくれるような事ができる先生を目指したい。ちがう仕事だとしても、だれかを笑顔にする仕事がしたい。その一つの笑顔から、このまちいっぱい笑顔が広がり、人々の優しさと温かさがあふれる、そんな未来であつたらうれしい。川崎市の浄水場から自分の未来が見えてきた。